

■ 論 文 ■

国家のはざまを生きる

－中国雲南省新平イ族タイ族自治区における文化的再開発－

村 島 健 司

(関西学院大学先端社会研究所専任研究員)

林 梅

(関西学院大学社会学部助教)

荻 野 昌 弘

(関西学院大学社会学部教授)

西 村 正 男

(関西学院大学社会学部教授)

■ 要 旨 ■ 国民国家は、今日の社会において政治的、社会的秩序を維持するための支配的な形態である。しかし、歴史的には国家の統治によらない仕組みを作り出してきた社会が存在する。本研究では、こうした社会が、国家に組み込まれることによってもたらされる社会変動に対してどのように向き合っていくのかについて、中国雲南省新平イ族タイ族自治区の事例をもとに、とりわけ改革開放以降の文化的、そして社会的変動に焦点をあてながら検討する。

新平県における文化変容を理解するために、本稿では、「文化的再開発」という概念を提示する。「伝統の創造」や「再帰的近代化」といった類似の概念に対して、文化的再開発概念は、経済開発と文化変容が密接に関わっていることを強調する。新平県の少数民族は、程度の差こそあれ、国家が促進する経済開発に服従し、経済や政治の要求に応じて自らの文化を再開発して表象することを余儀なくされている。たとえば、都市開発において建造されたモニュメントは、政府が意図する簡素化された少数民族の文化を表象する。あるいは、観光開発に伴い新たな舞踊が創造され、それが観光客の前で上演される。しかしながら、これらは国家の権力に対する単純な服従を意味する訳ではない。そこでは同時に、少数民族自身が自らの生活スタイルを保護しようとする試みも、観察することができるのである。

■ キーワード ■ 国家のはざま、雲南省新平イ族タイ族自治区、文化的再開発、少数民族、支系

1. 国家を知らなかった世界

国家は、人間が営む社会の形態として絶対的なものではない。ピエール・クラストル（Clastres 1974=1989）が南米の小規模な社会の調査によって示そうとしたように、権力の集中が起らないような仕組みを作り出している社会が存在する。南米にかぎらず、アジアにおいても、事実上、国家制度の枠内から外れたところで生活を営む人びとが数多くいた。こうした人びとは独自の言語と文化、生活様式を維持し、相対的に国家制度から自立したかたちで、社会を形成していた。

また、アジアの諸地域は、長いあいだ日本を除いて、欧米型の近代国家を形成しようとしなかった。中国やインドは、その結果、欧米や日本による支配を被ることになるが、20世紀に入っても、近代国家制度とは異なる支配形態の残存を可能にした。仮に、こうした地域を「辺境」と呼ぶならば、辺境のなかに現在の世界そのものの変容を捉える鍵があるのではないかというのが、本稿の問題提起である。こうした問題提起をするのは、現代社会を捉えるうえで、欧米や日本などの近代国家形成を積極的に押し進めた社会の現状に関する分析だけでは一面的すぎるからである。実際、「ポスト近代」「後期近代」と現代を捉える社会学のほとんどは、国民国家を確立した欧米社会の特徴を抽出したものにすぎない。それは、いわば「欧米に関する地域社会学」なのである。

欧米に関する地域社会学の限界を超えるための事例のひとつとして、本稿で注目するのが、ベトナムやミャンマーと国境を接する中国南部雲南省の新平彝（イ）族俣（タイ）族自治県である。新平彝で、現在「老街」すなわち旧市街地と呼ばれる場所にはじめて県城が築かれたのは、明代の万暦年間（1573-1620）のことである（楊編 2010:16）。中華民国期の最後の県長の屋敷である文明街王氏民居（県の文物保護単位）は、現在も残っており、歴史的に県城が地域の中心であったように見える。しかし、実のところ、新平には別の支配者がいた。

新平彝の西部に位置する哀牢山の中腹に、李潤之という人物に関する博物館がある。それは、この人物のかつての住居を利用したものである。李潤之は、共産党軍が入り込んで来るまで、この地域で、土司と呼称される官職に就いていた。中国史の観点に立てば、土司による支配とは、諸王朝が西南中国の少数民族地域を支配する際に、地域の土豪に官職を授けて行う間接支配のことである¹⁾。しかし、李は、馬の飼育から麻薬の売買にいたるまで幅広く経済活動を行っていた。また、地域内で初の中学（日本の中学校・高等学校に相当）まで設立しており、実質的に李は、哀牢山を中心地として、新平彝のかかなりの部分を支配していたのである。いまでも、新平彝城から哀牢山に向かう拠点である戛洒などの県内の主要な町や村までは、交通の便がいいとはいえない。道路は整備されつつあるものの、雨期には土砂崩れで主要道路が利用できなくなることが多いからである。地理的な条件だけを考えても、哀牢山の中腹に居をかまえていた李の支配地域は、明清などの王朝の末端に位置する県城から、相対的に独立していたと考えられる。

戛洒は、現在では地域の中心都市として、開発が積極的に推進されている。しかし、李が支配していた時代、そこは交易の結節点であったが、疫病を生みやすい環境にあり、昆明などから交易にやってくる漢族や回族の商人たちは、夏場リスクを軽減するため、より高地にある別の村に滞在し

1) 辺境の防衛で功成名を遂げた明の軍帥の末裔・李毓芳が清の乾隆帝に認められ、李氏一族が土司に任じられることとなったため、珍しい漢人の土司が誕生したという（楊編 2010:16）。

ていた。また、夏酒は河川の流域地帯に位置し、頻繁に水害も起こっている。現在の町も、2000年以降に新たに建設されている。

中華民国の統治下において、自由を享受していた李は、第二次世界大戦後の国民党と共産党による内戦で国民党軍に協力していたため、共産党によって、その支配に終止符が打たれた。この戦闘(内戦)も、すぐに終わったわけではなく、中華人民共和国誕生後、1950年まで続いていた。

それでは、かつての新平県は、李潤之の「王国」と権力の末端である県域との政治的均衡で捉えるだけで十分であるかといえばそうとはいえない。それは、1902年に雲南省を調査した鳥居龍蔵の記録に明らかである。鳥居は、新平県に隣接する江川県を調査しており(両県はともに玉溪市にある)、その調査からは、別の世界が見えてくる。鳥居の記録には、次のような記述がある。

余はまず役所について口口調査の件を交渉すると、応対した官吏は壮年の人であって、あまり威厳も無さそうな人物であったが、余の申し出を聞いて非常に驚き、これを阻止しようと企てた。元来この付近の口口は獐猛で、むかしからしばしばシナ人の市街に対して襲撃を試みた来歴があるので、もし今回の調査に際して彼らの意にさからうようなことがあったら、またもやどんな騒ぎになるものでもない(鳥居 1980: 141)。

つまり、王朝の末端で働く役人にとって、口口²⁾が支配する地域は、容易に足を踏み入れることができない地域として認識されていたのである。

「獐猛」な口口やその他の少数民族は、県域の官吏や李潤之、特に後者の支配を認識しながらも、文化的な同一性を保ちながら、相対的に自立した生活を営んでいた。この状況が一変するのは、中華人民共和国の誕生からである。本格的な近代国家の誕生は、雲南省に三つの大きな変化をもたらすことになる。それは、まず、建国初期の民族識別工作による民族名称の確定である。それまで、それぞれの集団名を名乗っていた各集団が、民族識別工作という中央の「知」によって、特定の「民族」にまとめられた。そもそもこの民族という概念自体が近代の産物であり、民族識別工作は、まさに近代化政策の一環として捉えることができる。口口もこの政策のなかで、彝(イ)族³⁾という呼称が与えられる。

ちなみに、新平彝族タイ族自治州は、その名の通り、彝族とタイ族が数多く住む地域である。2011年までに全県の戸籍登録人口は273611人で、内農村人口は86.4%、彝族とタイ族人口は全人口の64.9%を占め、外来人口が非常に少ない(新平彝族傣族自治州地方誌編纂委員会編 2012)。

ただし、このように政治的に確定された民族という概念だけで、雲南省の諸集団を理解するだけでは不十分である。というのも、民族とは別に「支系」という概念があるからである。支系は、民族識別工作以前から存在する集団の呼称で、「自称」と「他称」のふたつがあり、必ずしも一致するわけではない(郭ほか編 1999: 4)。自称は、まさにみずからの集団を呼ぶ名称で、本稿で取り上げる新平彝族タイ族自治県の彝族には、ニスー、ナスー、ラロなど八つの支系(自称)があり、

2) 現在では、「口口」という呼称は蔑称と捉えられている。

3) 「彝」という字も繁栄を表す「米」や「糸」を含む当て字であり、もとは異民族を総称する「夷」族とされていた。

その人口は12万9800人を数える（新平彝族傣族自治州概況編写組編 2007:8）。また、他称にも、漢族によるものと、他の民族（たとえばチベット族など）によるものでは、呼称が大きく異なる。タイ族に関しては、花腰タイ（他称）が居住しており、タイヤー、タイカー、タイサーと自称している（新平彝族傣族自治州概況編写組編 2007:14）。

民族識別工作以後、雲南省に住む少数民族は、三つのアイデンティティを持つことになる。たとえば、イ族の場合、まず、ロロに代わり、「彝」という民族識別工作によって作られた民族としてのアイデンティティ、それとは別に歴史的、文化的アイデンティティである個々の支系、そして中国人としての国民意識である。

第二の変化の波は文化大革命であり、この時期、少数民族の文化は、もっとも危機に瀕した。たとえば、イ族の文字で書かれた経典の多くは焼かれてしまい、祭祀などの伝統儀礼を司ることもできなかった。そして、文化大革命の時代が終わりを告げ、第三の波が訪れる。それが、1980年代から本格化した改革開放である。それは、中国外部からのよりグローバルなヒトとモノの流入を生み始める。1990年代、新平の各民族は、再び各民族みずからの伝統を見直す機会を得る。しかし、それもつかの間、2000年代に入ると、急速に開発が進み、山間部の農地開発だけではなく、鉱山開発、製糖業など大規模な開発が行なわれる。同時に、経済だけではなく、民族文化に関するさまざまな表象が積極的に演出されていく。

本稿では、近年の民族文化の再構築を〈文化的再開発〉という概念を用いて捉えていく。今日、開発は経済的な側面だけではなく、文化的要素を不可避免的に孕みながら進む。イ族タイ族自治州である新平県の場合、それは、イ族やタイ族のような民族の文化が、都市開発や観光開発のなかで表象されることを意味する。文化的再開発が抱える理論的課題については、最後に論じたい。

2. 県城の都市開発と民族文化

2.1 都市化政策と県城行政区域改編

新平イ族タイ族自治州は、昆明から西南に182 km 離れ、2012年の統計では人口約27万人、そのうち少数民族人口は約7割を占める。中でもイ族が最も多く約48%、タイ族がそれに続き約16%、そして漢族人口は約30%である。行政区域は、県城の桂山街道、古城街道を中心に、揚武鎮、漠沙鎮、戛洒鎮、水塘鎮と、平甸郷、新化郷、老場郷、建興郷、平掌郷、者竜郷で構成されている。また、炭鉱業、製糖業、葉タバコ栽培、牧畜業、観光業が現在の五大産業である。

本節では、まず県城において推進されている文化的再開発について考察する⁴⁾。

歴史的に県城の住民は、漢族と商業に従事するイスラム教徒回族が中心であった。しかし、今世紀に入って中国政府が押し進めている都市化政策にしたがい、新平県政府は、積極的に、県城の拡大を進めた。その結果、徐々にイ族やタイ族の人びとが県城に移り住むようになった⁵⁾。これに伴

4) 本調査は、2013年8月、2014年3月、8月に関西学院大学先端社会研究所の共同プロジェクト「中国国境域／雲南」班のメンバーである本稿の共同執筆者らによって実施された。

5) 中国において都市化とは、国家の世界レベルにおける発展水準を反映する重要な尺度であるだけでなく、地域経済の水準を測る基準にもなっている。1980年ごろ、中国全体で19.4%に止まっていた都市人口は、現在ではすでに全人口の50%を超えている。

い、県政府は、2011年3月に行政区の改編を行い、桂山鎮を桂山街道と古城街道の二つに分割した⁶⁾。

桂山街道は、県の東北部に位置し、古くからの市の中心部である五桂、鳳凰、青龍、太平、亜尼の5つの社区で構成され、現在は、「老街」と呼ばれている。人口は34309人で、農業人口はわずか2.2%、少数民族人口は43%を占めている。「老街」の南部に、5.3億元を投じて、県政府が開発したのが、古城街道沿いに設置された古城、納溪、昌源、他拉、錦秀の5つの社区である。古城街道の人口は18070人であり、そのうち農業人口は53%、少数民族人口は63.7%に上り、その多くをイ族が占めている⁷⁾。行政区改編の結果、2010年末の時点で42963人であった人口は、2012年末には二つの街道を合わせて52379人に増え、一方で農業人口は、2010年の46%から2012年には40%に減っている。県周辺に散在していたイ族の人口などが、近年の開発によって県内へと移り住んでいるのである。

2.2 イ族文化と文化的再開

県における都市化は、単なるインフラ整備にはとどまらない。それは新たな都市の中心の構築であり、そのために象徴的意味がある建造物が建設されている。この意味で、都市開発は文化的再開なのである。そして、その際に積極的に援用されるのが、民族文化の表象である。

それは、まず新たな県の中心である民族広場にみることができる。ここは、1945年に李潤之が抗日戦争勝利の記念碑を建てた場所だが、広場が建設される以前には、共産党政府が設立した文化会館と、唯一の憩いの場であった茶館を除けば、そのほとんどが農地や空き地だった（新平彝族傣族自治州概況編写組編 2007:39）。茶館を経営していたのは地元の商人である李子清で、茶館の前に芝居ができるスペースを設けられ、板凳劇⁸⁾が演じられていた。

民族文化広場は、敷地面積が13万m²（2008年時点）もあり（楊編 2010:72）、現在も拡張工事が続いている。広場には、体育館、五彩雲楼と呼ばれる三重塔、山水を演出する人口滝、広場の中心である噴水があるが、特に注目すべきは、県のシンボルである彫像と、12の県内の行政区域の特徴を表現した12本の柱である。

彫像は、銅で鑄造したイ族男性とタイ族女性の像を大理石の台座に固定したものである（写真1）。イ族の若者は、大自然のなかで民族楽器を弾きながらイ族の人々の暮らしを歌い、タイ族の少女は肩に魚かごを担いでイ族の若者が弾いている楽器の旋律に耳を傾けている。この豊かな未来を憧憬するイ族とタイ族の若者の像は、新平に居住している8つの民族の団結と調和を表しているという（楊編 2010:72）。

また、直径1.5m高さ9mの青石材でつくられた12本の円柱（写真2）の上部にはイ族文化の

6) 2013年1月13日『新平彝族傣族自治州第16回人民代表大会第1次会議』における県長の「政府工作年報告」より。

7) 新平県政府ホームページ (<http://cache.baiducontent.com>) の「郷鎮概況」より。

8) 板凳劇とは、地域ごとに特徴を持っている芝居の一種で、民間レベルで人びとが自らつくり、演奏し、歌いながら演じるものである。人びとは広場に集まり、そこに板凳という木製で背もたれのない、横長い腰掛け椅子をいくつか置いて、楽器を弾く者や歌手が輪をつくり、芝居を行うことから板凳劇と呼ばれている。

象徴とされる4頭の虎が東西南北に向かって施されている。各柱はそれぞれ12の郷と鎮を意味し、各行政区域の自然地理、風土文化の特徴が彫刻されている。この12本の柱が取り囲む空間が広場の中心となっており、主な集会や祭りが行われる。また、それだけでなく、毎日夕方になると中央の噴水を囲んで、多くの人びとが踊りを楽しんでおり、その年齢層はこどもから高齢者まで幅広い。



写真1 イ族男性(右)とタイ族女性(左)の像



写真2 広場を囲む12本の柱

広場の前を通る大通り新平大道は、昆明までつながっており、1997年から2010年にかけて整備された。大通りの両側には木や花が植えられた小規模の公園がいくつも設置され、生態学に基づいて、緑地化された都市を意味する「生態園林都市」としての新平の象徴となっている。

ここで注目すべきは、大通りの両側には一定の間隔をおいて、60基以上の石碑が置かれており、イ族の經典であるピモの經典から抜粋された「教え」が、イ族の文字と漢語訳で記されている点である(写真3)。漢族、回族、タイ族が混在しており、漢族人口が半分ほど占めている街であ



写真3 石に刻まれたイ族文字(左)と中国語訳(右)



写真4 イ族文化が刻まれた石版

るにもかかわらず、イ族のピモの経典を石碑に記し、大通り沿いに一定間隔で並べているのである。

また、老街の南部が開発された結果、かつては県城のはずれに位置していた平甸河が、現在では県城の中心となっている。その両岸には2102個の大理石の石版が設置されており、全長4850mのイ文長廊がある。石版には、イ族文化が紹介されており、各支系の紹介および民族風情、神話伝説、人物古典、天文地理、服飾飲食、生産労働を描いている（写真4）。そのほか、新平イ族の繁栄と文化景観、イ族文字の起源およびその発展の歴史を紹介している。この長廊も、文化的再開発の一環として捉えることができる。長廊の文化的価値を権威付けするかのよう、2010年、中国世界記録協会は、長廊を『世界で最も長い彝族浮彫文化長廊』に認定している。

文化広場や、新平大道、イ文長廊が示しているように、県城では、歴史的には主たる居住者であった漢族や回族の文化ではなく、イ族文化を前景化することによる文化的再開発が推進されている。これは、新平県がイ族タイ族自治県であることに起因しているのかもしれない。自治県内では、イ族が多数派なのである。それは、村落の生活のなかで培われた文化とはかけ離れた開発を演出するための「文化」表象である。

新平県が推進する文化的再開発は、観光資源としての利用をも視野に入れた再開発のなかで構築されたものにすぎない。それは、明らかに民族識別工作によって構築された民族概念の枠組みに基づいている。近年、支系という概念で認識されはじめた真性の呼称とその「真正」な文化の存在は、そこでは表象されない。そもそも、真正な文化というものが存在するのか。そして、それはどのようなものなのかについては、ここで論じる余裕はないが、次に都市再開発で全面に押し出された文化表象ではなく、個々の村落において、文化的伝統にはいかなる変容がもたらされているのかについて見てみたい。

3. 哀牢山地区における開発と民族文化の変容

3.1 改革開放に伴う製糖業の拡大と民族文化

県城から西100kmほどに位置するのが、雲南省南西部に北西から南東へと連なる哀牢山山脈の中心で、標高3166mの哀牢山である。哀牢山一帯の民族ごとの居住分布を見てみると、イ族、ハニ族、漢族は主に標高の高い山間地域に居住する一方、タイ族は標高の低い河谷地帯を主な居住地としている。

この地域を長年研究している人類学者の李永祥によると、かつて李潤之が支配していた時代には、山間部ではアヘンを栽培することが可能で、住民たちはアヘンの売買により経済的に非常に高い収入を得ることができていた。しかし、こうした民族間関係は1949年を境に変化する。中華民国期には山間部のアヘン栽培の元締めをしていた李潤之の支配体制は崩壊し⁹⁾、山間部に居住する人びとはアヘン栽培を糧に生活をするができなくなった。

山間地域の生活が徐々に豊かになるのは1980年代に入ってからのことであった。1978年に鄧小

9) かつての「土司」は、現在では共産党政府により「土匪」として表象されている。詳しくは、林（2013）を参照のこと。

平によって始められた改革開放政策が新平県にも影響をもたらしたのである。その後、経済面だけではなく、かつての伝統を取り戻そうという積極的な動きが出てくる。山間部に位置するイ族の竹園村では、1996年に、文化大革命のあいだ禁じられていた龍神祭が初めて本格的に再開されたが、これはその一例である。

イ族社会では、宗教儀式の主宰者であるピモを中心に、イ族文字で記された経典が受け継がれ、祭祀などを通して民族文化の継承、保存と伝承に貢献している。竹園村において、その祭祀の中で最も重要であるのが、毎年旧暦2月最初の鼠の日から始まる龍神祭である。龍神祭は3日間にわたって行われ、龍神祭の開催中は村を挙げてさまざまな儀式が盛大に繰り広げられる¹⁰⁾。特に、2日目にあたる「ミカファ」では、村のシンボルである龍樹に捧げる儀式がピモを中心に執り行われ、龍樹を中心に村人すべてが集い、昼夜問わず食事や踊りを共にする。前節で考察した、新平県城の民族文化広場では表象されない儀式や踊りが、竹園村の龍神祭に垣間見ることができる。

しかし、1996年の調査から20年弱の月日が流れた現在、龍神祭にかつてのような活況を見いだす事はできない。その理由のひとつは、若年人口の外部流出に伴い後継者が不足し、担い手が高齢化しているからである。そしてもうひとつの理由として、山間部にまで浸透してきた製糖業との関連を指摘することができる。

改革開放以降、新平県政府は大規模なサトウキビ栽培発展計画を策定し、製糖工場の建設と原料となるサトウキビ農園の拡張を推進する。2001年には、新平県が「国家十五大製糖用作物生産基地県」に選ばれ、2005年になると耕地面積約10000ヘクタール、総生産量約616800トンに至った(新平彝族傣族自治州概況編写組編 2007:81)。この50年間で耕地面積にして約100倍、収穫量として約200倍もの規模に成長したことになる¹¹⁾。

かつてサトウキビ栽培は標高の低い地域で営まれてきたが、この拡張政策により河谷地域のみでは土地が不足し、山間部にまでその範囲が及ぶようになった。また生産技術の向上は、山間地域においても効率的にサトウキビを栽培することを可能とさせた。そして、その担い手として山間部に居住する人びとは生活の糧を得ることになる(李 2008:78)。

新平県にはいくつかの大規模製糖工場があり、それぞれ周辺の多数の村落と契約関係にある。工場を常時稼働させる必要がある製糖工場は、契約関係にある各村落に対して収穫時期を分散させ、

10) 龍神祭の詳細については荻野(1996)を参照のこと。また、当時は交通が発達しておらず、竹園村へは昆明から車で数日を要した。そもそも、1992年まで新平県は外部に開放されておらず、外部の者が訪れることは原則なかった(荻野 1996:117)。

11) 李永祥の分析によると、製糖工場は従来、大規模国営事業として国家権力の意図のもと運営されてきた。工場長は政府によって任命され、政府の指導によってサトウキビ栽培に従事する各農村の経済発展政策が執行されてきたのである。計画経済時代は、政府の意図が経済意図を超越していたと考えることができる。一方、改革開放が始まり市場経済時代に入ると、地方政府の支持を取り付けた民間資本の製糖工場が誕生し、サトウキビ産業の拡大に貢献する。非国営企業の参入に伴い競争力は激化し、従来の国営企業は存続の危機に面し、新平県における製糖工場も民営化などの制度改革に乗り出さなくてはならなくなる。民営化後、製糖工場の指導者は政府高官などの国家の正式な幹部ではなくなるが、それにもかかわらず全体としての経済発展政策や製糖工場の役割は変化しない。つまり、政府は製糖業に関わる政府内の部門を立ち上げ、製糖工場と農民の間の新たな関係の調整者として、国家は依然として農村の経済に大きく関与し続ける。国家権力は経済発展の中で重要な要素を占め、農村の発展は地方企業による牽引だけでなく、政府による調整が必要であり、製糖工場と農民の関係とは、国家と農民との関係であるのだ(李 2008:96-97)。

村落毎に異なる期間にサトウキビを納品させる。そのため各村落では、製糖工場に指定された期日に従ってサトウキビを栽培・収穫し、それを契約先の製糖工場に納める必要がある。たとえば竹園村では、ある月の20日間が工場への納入期間であると定められている。この製糖工場により定められた短い期間内に大量の収穫を行う必要があるため、竹園村では村中の労働力を総動員してサトウキビの収穫作業に当たらなければならない。

製糖工場が定める収穫期間は、村の事情が考慮されることはない。竹園村では昨年、収穫期間が龍神祭の日と重なるという事態となった。そのため期間中は、多くの村人が労働力としてサトウキビ収穫にとられ、例年のように龍神祭に参加することができなかった。結果として、祭りの規模は大幅に縮小せざるを得ず、多くの儀式が簡素化されることとなる。かつて「ミカファ」の日には、龍樹に捧げ終えた豚肉などの食事を龍樹前の広場にて村人全員で食し、一晩中踊り続けていたが、昨年は龍樹に捧げる儀式は行うものの、サトウキビ収穫へとかり出され、祭祀自体に参加することができなかった者には、それらの食事が自宅に送られるにとどまった。

この事例は、製糖工場から指定された収穫日が偶然に竹園村の最も重要な祭祀である龍神祭の期間の重なってしまったために生じたことかもしれない。ただし重要なのは、たとえ偶然とはいえ村で最も重要な儀式と重なったとしても、儀式ではなくサトウキビの収穫を優先しなければならないことであろう。改革開放以降、新平県にも市場経済の波が訪れることにより製糖業が拡大し、山間部の村にもある程度の豊かさをもたらした。しかしその一方で、豊かさの代償として製糖工場に依存せざるを得ず、結果として村の文化は簡素化されていくことにつながるのである。

3.2 観光開発とタイ族文化の変容

哀牢山の麓、峡谷を流れる紅河沿いに形成された低地地帯には、現在新平県で県城に続く第二の町となっている戛洒鎮がある。かつて、戛洒鎮の中心部である低地部は、アヘンの栽培に適さないだけでなく、洪水が多発し、熱帯病が蔓延する非常に危険な地域であり、「瘴気」が漂う場所とされていた。李潤之が支配していた時代には、交易のためにアヘンを含む地域の生産品を扱う市が存在していたが、夏場のあいだ、昆明などからやってきた商人たちは、瘴気を避けるため、取引が終わると、より高地にある漢族の村に滞在した。水害によって、町全体が壊滅したこともあった。

こうした状況は、2000年代以降に一変する。町を高台に移し、数多くのホテルや娯楽施設が建設され、休日になると、新平県内だけでなく、昆明市をはじめとする雲南省各地から観光客が集まる。これは観光・商業・飲食・娯楽・住居を一体として民族風情を取り入れた都市開発が始められた結果である（新平彝族傣族自治州概況編写組編 2007: 263-264）。

戛洒における民族風情の中心となるのは、花腰タイと呼ばれるタイ族の服飾文化や舞踊文化である。なかでも毎年旧暦二月上旬に開催される「花腰花街節」では、街全体が花腰タイ一色に彩られ、大きな賑わいを見せることになる。

李永祥によると、雲南省の文化産業は2003年時点で全省GDPの4.01%を占めていたが、2004年には同じく4.53%、2005年には5%を超えるなど、年ごとに成長を遂げている。県政府も県の五大産業のひとつである観光業の促進のために積極的に投資を行い、とりわけ2000年以降は、花腰タイ文化の宣伝活動を積極的に推進する。たとえば、花腰タイ国際学術討論会を開催し、国内外

の専門家やメディアを招聘して、潜在的観光客を掘り起こそうとした。また夏酒において、県政府主導で花腰タイ花街節を開催し、花街節の企画・運営や商業活動を昆明にある民族文化の観光開発・設計・展示・広報を手がけるイベント企画会社へと委託し、このイベント会社を通して花街節が創作されていった。県政府は、花腰タイ文化を中心とした観光ブランドイメージを確立させていったのである（李 2008：171-172）。

夏酒鎮中心部から南へ1キロほどのところに建設された、花腰タイ大檳榔園もそのひとつである。大檳榔園の中には、花腰タイ文化生態旅行村があり、テーマパークさながらにタイ族の生活を見学することができる。その中心には大きな舞台と100名ほどを収容するテーブル席があり、タイ族の民族料理を味わいながら、華やかな民族衣装に身を包んだ花腰タイの歌謡や舞踊を見学することができる。また、新平県のすべてのホテルでは、従業員はタイ族の民族衣装を着用しなければならない。たとえ彼女たち自身がタイ族でなくとも、花腰タイの表象として着用する必要があるのである。

では、本来は他称である花腰タイとは、そもそもどのような民族集団であるのか。

今日、花腰タイとして表象されている新平県のタイ族は、人口約4万人、県内総人口の約16%を占め、約48%を占めるイ族に続く（楊編 2010：91-92）。雲南省におけるタイ族としては、新平県よりさらに南西、ミャンマーやラオスと国境を接するシーサンパンナ（西双版纳）タイ族自治州が代表的な居住地として知られる。シーサンパンナのタイ族は主に支系タイルーに属し、自らの文字を持ち、宗教としては上座部仏教を信仰する（川野 2013：95）。一方、新平県におけるタイ族にはタイヤー・タイカー・タイサーの三つの支系であり、自らの言語は持つが文字は持たない。またタイ族としては珍しく、上座部仏教ではなくアニミズム信仰を持つ。

さらに楊によると、新平県のタイ族はいくつもの奇妙な特徴を有している。たとえば、各支系の名称が特異で、それぞれタイ族のことばで、タイヤー（傣雅）とは「棄てられた者」、タイサー（傣洒）とは「砂上の市場の者」、タイカー（傣卡）とは「漢族からタイ族へと転じた者」¹²⁾を意味する。また、夏酒地区の気候は熱帯であるにもかかわらず、その伝統的服飾は分厚く重い衣服を重ねるものであり、山岳民族の伝統を思わせる。つまり、元来この地に居住していたのではなく、山地から移住してきた可能性が高い。

婚姻概念も特徴的で、古くから開放的な恋愛観を有し、自由恋愛であり、婚姻に関するタブーもない。また飲食文化において、「世の中の動く物は肉であり、緑の物は野菜である」との考えのもと、自然の生物すべてを豊かな食物であると認識している。そのほか入れ墨やお歯黒、陶器制作などの習俗を持つ（楊編 2010：52-53）。

ここで重要なのは、新平県のタイ族は、漢族やイ族と比較すると、歴史的に非常に貧しい生活を強いられてきたという点である（李 2008：76）。それはイ族やハニ族が、気候が穏やかでアヘン栽培も可能な山間部に居住していたのに対して、タイ族は熱帯病や洪水のリスクが伴う紅河沿いの河谷地帯に居住していたことによる。タイサーの「砂上の市場の者」とは、河岸の地盤がゆるい土地（砂上）に住んでいる人びとという意味であり、事実、主に紅河の河岸に住んでいたのがタイサー

12) 「カー（カ）」とはタイ族のことばで「他者」を意味する。すなわち、「タイカー」とはタイ族ではない者という意味である。

である。元々、劣悪で、危険も多い土地に移動して、住まわざるをえなかった人びとが、新平ではタイ族と総称されているのである。「棄てられた者」や「漢族から転じた」「他者」であるタイヤーやタイカーも、同様に、何らかの理由で、本来帰属していた集団から逸脱したような人びとである可能性が高い。

現在も、夏酒の市場では、竹細工や組紐などの工芸品を路上で売るタイ族の女性が見られる。そこには、イ族のような農耕民とは異なる行商の名残がある。一方で、イ族やハニ族のような伝統的舞踊は持たず、大檳榔園の舞台上で踊られる踊りは、観光客向けに新たに創造されたものにすぎない。イ族やハニ族の舞踊は、集団でひとつの円を形成し、円の内側を向きながら円周上を移動することにより踊り続ける。一方タイ族の観光用舞踊は、それぞれが列をなし、外側の観客に向けて踊りが展開される。

また、イ族やハニ族には祭祀を司る宗教的指導者が必ず存在する。イ族ではビモが、ハニ族ではバーマと呼ばれる人びとがそれに相当する。一方のタイ族集落では、イ族集落と同様に龍樹を祀る祭祀を観察することができたが、そこにビモやバーマのような明確な宗教的指導者の存在を確認することはできなかった。

いずれにせよ、タイ族の生活水準が、以前に比べ、飛躍的に向上していることは疑いない。耕作可能な土地に乏しく、依存せざるをえなかった工芸を、ときには国際機関の支援を得て積極的に商品化することができた。同時に、県政府の花腰タイ族文化を前面に押し出す観光政策のなかで新たに生みだされた、花腰タイ族を起源とするかのような文化に、さほどためらうことなく、同一化していった。これは、まさに典型的な文化的再開発の事例である。

4. 結論に代えて——文化的再開発の諸相

文化的再開発に先行する類似概念として、「伝統創造 (Invention of Tradition)」や「再帰的近代化 (reflective modernization)」がある。これらは、一見伝統的にみえるものも、近代社会において、創造／捏造されたものがあり、それはナショナリズムと結びついている点や、仮に伝統があるにせよ、伝統そのものの必要性について常に問われ、伝統も変容していく点を指摘する。新平県における文化的再開発も、これらの一連の議論に連なる現象であるように見える。

しかし、表面的類似性の奥底に、既成の理論では十分に汲み取られていないいくつかの論点がある。

まず、伝統創造／捏造が、開発と深く関わっている点である。大規模な開発、アンリ・ルフェール (Lefebvre 1974=2000) の用語を借りれば空間の生産は、民族文化表象を不可避免的に伴っている。改革開放による資本主義的开发は、文化的要素を必要としているのである。また、すでに社会学や人類学、歴史学で指摘されている「伝統の創造」や「伝統の見直し」にも、いくつかの異なるタイプがあるという点をあげることができる。本稿で取り上げた事例のなかでは、文化大革命の終焉とともに復興したイ族竹園村の祭りや踊りと、文化的再開発の一環として「開発」されたタイ族の踊りとでは性格がまったく異なる。竹園村の例は、県政府が押し進める文化的再開発とまったく異なるものではないが、少なくとも当初は、祭祀に詳しいビモ主導のもと、「伝統」を忠実に復活

させようとする強い意志があった。タイ族の場合は、貧困から脱却するために、受動的に政府や国際機関の経済的、文化的支援を受けたタイプである。

さらに、われわれが目撃したいのは、県城の公園などで、昼間からイ族のお年寄りが、かつて村祭りで踊っていたように、自分たちの踊りを踊っているという光景である。祭りという制度のなかではないので、民族衣装を着ているわけではない。また、本来、踊りを指揮して、楽器を演奏するピモなどの存在もない。しかし、その身体的な動きは、まさに竹園村の祭りで踊っていた村人と同じである。竹園村での祭りの規模は縮小しているが、踊る身体は健在であり、しかも祭りと異なり、毎日踊りは続く。この光景は、単なる「暇つぶし」のために踊っているにすぎないように見えるが、このなかにこれまで掬いとられることがなかった「文化」が存在するのではないか。

文化的再開発は、都市再開発において文化的要素が不可欠になっているという点では、新平県にかぎらず、グローバルに見られる現象である。しかし、新平県では、開発がある特定の民族文化の表象と緊密に結びついている。それは、県外部の他者の視線を意識して構築されたものにすぎない。一方で、文化的再開発の陰で、それとは別の「文化」は生き続けている。それは、民族ではなく、支系の文化であり、またこれこそ真正の文化であるのかといえ、それとも異なる何か人間存在を支える核となるもののように思われる。その核とはどのようなものであるかについて論じるのは、別の機会に譲りたい。

5. 補論——新平県城老街における文化的再開発

5.1 新平県城と土司の邸宅

中国の伝統的な都市は城壁に囲まれていた。一般的に日本の郡ほどの大きさに相当する「県」の中心に築かれた、城壁に囲まれた都市が県城である。かつて大城と呼ばれたこの県城は東西南北の四ヶ所に城門を有していた。清代にはさらに南方に城壁が増設され、それを小城（あるいはその形から、葫蘆城、葫蘆は瓢箪の意）と呼んだ。その後城壁は取り壊されているが、現在桂山街道と古城街道に分けられているこの古い城内の地区は中華民国期には平山鎮と呼ばれ、人民共和国になってからは城関鎮を経て、2011年までは桂山鎮と呼ばれていた¹³⁾。そもそも現在の彝族の元となる民族集団の土地であったこの場所に、万暦年間に新平県がおかれ県城が作られたのは、明の將軍鄧子龍が彝族の蜂起を平定したことによるものであり（楊編 2010: 71）、この地は県の政治的中心となり、官＝漢族文化によって支配される場所となっていた。

清代に拡張された部分を南北に走る「中街」。その中ほど、道路の西側に、かつての土司である李潤之の屋敷がある。土司とは、中国の王朝が西南の少数民族地域を支配する際に少数民族の土豪に官職を授けて間接支配させたものだが、辺境の防衛で功成り名を遂げた明の軍帥の末裔・李毓芳が清の乾隆帝に認められ、李氏一族が土司に任じられることとなったため、珍しい漢人の土司が誕生したという（楊編 2010: 16）。土司府は新平県の西端に近い哀牢山中にあり、新平県外にも跨る勢力圏を保持していたが、県の政治的中心である県城にも邸宅を構えていたわけである。三階建の

13) 以上、新平県城の歴史については（楊編 2010: 71）参照。

この屋敷は、当時この県城内で際立って豪華な建物であっただろう。「富昌隆」がその商号であり、2005年に県政府より文物保護単位に指定されている。だが興味深いのは、現在の所有者はそれに先んじる2000年に二十六万円で購入し、さらに三十五万円をかけて改装したという点である¹⁴⁾。このような文化財が消費の対象とされるようになってきている現状は興味深い。所有者は、購入後に発見された書画なども積極的に保存し、また屋内に展示をしている。(彝族文化が政府によって顕彰される一方、)かつての県城を支配していた漢族文化はこのように民間人によっても保護されているのである。

城内には、他にも民国期の最後の県長だった王氏の屋敷である文明街王氏民居(県の文物保護単位)、富春街9号民居(県の文物保護単位)、富春街民居(ワンランク上の玉溪市の文物保護単位)、順城街民居(県の文物保護単位、現新平県文物管理所)などが新平県や玉溪市により保護されており、かつての県城の繁栄ぶりを今日に伝えている。

5.2 清真寺と回族

城内は漢族文化が支配的だったと述べたが、実は漢族とは異なる宗教を信仰する集団が古くから存在していた。イスラームを信仰する彼らは、ムスリム移民や漢族の改宗者によって形成された集団の子孫であり、漢族との通婚などを通じて極めて漢族と近い文化を有しつつも、独自の宗教や食事などの習慣を有していた。中華民国期には回民と呼ばれた彼らが「回族」という民族概念へと整理されることになるのは、中華人民共和国成立後の民族識別工作の結果である(中国ムスリム研究会編 2012: 36-40)。

さて、新平に回民がやって来たのは明代の洪武年間にあたる1368年のことだとされるが、万暦年間に新平県が置かれ県城が建設されると、大量の回民が県城に定住したという。彼らの礼拝の場である清真寺(魯賢街2号、城内の東部)が建設されたのも万暦年間の1591年のことであり、県城建設から間を置かずに建設されたことが窺える。この清真寺は新平県に現存する唯一の明代建築だとされている。清代に至り、回民の集会所が制限され、清真寺も荒れ果てた時期もあったようだが、清末になると復興していく。特筆すべきは、この寺院には西太后と光緒帝の筆による扁額が飾られていることである。民国期に入り、1913年には回民のための小学校が設けられたこともあったという。その後、人民共和国内閣後は、文化大革命中など宗教活動が行われなかった時期もあったようだが、建物は保存されてきた。2001年には新平県、さらには玉溪市の文物保護単位に認定され、2010年には文物保護のため清真寺の規模を元の二倍近くまで拡大した。現在ではイスラームに則った礼拝が定刻に行われる姿を目にすることができる¹⁵⁾。このようにみると、回族文化も県城において無視することのできない位置を占めていたといえるだろう。

現在でも、この清真寺からさほど遠くない、県城の旧東門外付近に数戸の回族の住戸が確認でき、近くにはムスリム用の食料品店なども散見される。住人の一人に話を聞いたところ、彼らの話す言語は漢民族と変わらない中国語(雲南方言)である、とのことであった。現在では城内にも、

14) 2013年8月26日のインタビューによる。

15) 以上、(楊編 2010: 71)、および2013年8月、2014年3月の二度の調査、清真寺の前に掲げられた説明板の紹介などによる。2014年3月の調査では、礼拝の様子も見学することができた。

彝族やタイ族の住民も少なくないようであるが、かつての県城は漢族文化と、言語の上では共通性を持ちながらも宗教と習慣が異なる回民文化によって構成されていたことは確認しておきたい。その一方で、県城の南側に新たに開発された地域では、彝族文化を前面に打ち出した都市建設が行われており、県城の漢族・回族の文化遺産と好対照をなしているのである。

付記

本稿は、関西学院大学先端社会研究所共同研究プロジェクト「中国国境域／雲南」班、および科学研究費助成事業研究プロジェクト「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」（基盤研究（C）、代表：林梅）における研究成果の一部である。

参考文献

- 中国ムスリム研究会編, 2012, 『中国ムスリムを知るための60章』明石書店.
- Clastres, Pierre, 1974, *La Société contre l'État. Recherches d'anthropologie politique*, Minuit (= 渡辺公三訳, 1989, 『国家に抗する社会－政治人類学研究』水声社.)
- 郭ほか編, 1999, 『雲南少数民族概覧』雲南人民出版社.
- 川野明正, 2013, 『雲南の歴史：アジア十字路に交錯する多民族世界』白帝社.
- Lefebvre, Henri, 1974, *La Production de l'espace*, Anthropos (= 齊藤日出治訳, 2000, 『空間の生産』青木書店.)
- 李永祥, 2008, 『国家権力与民族地区可持続発展－雲南哀牢山区環境、発展与政策の人類学考察』中国書籍出版社.
- 林梅, 2013, 「観光開発をめぐる歴史的文化遺産の真正性：中国雲南省新平イ族タイ族自治州戛洒鎮を事例に」山口覚ほか編『フィールドは問う：越境するアジア』関西学院出版会 59-83.
- 荻野昌弘, 1996, 「食と供犠：中国雲南省ニスー族の龍神祭」『関西学院大学社会学部紀要』75: 117-126.
- 新平彝族傣族自治州地方誌編纂委員会編, 2012, 『新平年鑑』徳宏民族出版社.
- 新平彝族傣族自治州概況編写組編, 2007, 『新平彝族傣族自治州概況』民族出版社.
- 鳥居龍蔵, 1980, 『中国の少数民族地帯をゆく』朝日出版社.
- 楊承潭編, 2010, 『導游新平』新平哀牢山有限公司.

Living on the Margin of the Nation-State the Cultural Reconstruction
in Xingping Yi and Dai Autonomous County

MURASHIMA, Kenji

LIN, Mei

OGINO, Masahiro

NISHIMURA, Masao

(Kwansei Gakuin University)

Abstract

The Nation-State is, today, dominant form of political and social order. However, there exist societies that are not accustomed to this type of governance. This paper tries to show how this kind of societies face up to social change brought by the power of Nation-State by taking an example of Xingping Yi and Dai Autonomous County, Yunnan. The paper focuses especially on cultural and social change after the Chinese Economic Reform.

The paper proposes the concept of *cultural reconstruction* to understand cultural change in Xingping. In comparison with similar concepts like “invention of tradition” and “reflexive modernization”, cultural reconstruction emphasizes the close link between economic development and cultural change. The ethnic minorities in Xingping are more or less subjected to economic development that the State promotes and have to reconstruct their cultural representation according to economic and political demand ; urban development implies the construction of monuments showing simplified official cultural representation of ethnic minorities ; a new type of dance is created for tourists. However this is not a simple submission to the State power. It is observed that they also preserve their own life style.

Key words : margin, Nation-State, Yunnan, cultural reconstruction, branch of ethnic minority group